

昆虫の標本を指さしながら、虫と遊ぶ体験の大切さを話す名和哲夫さん＝岐阜市の名和昆虫博物館で



# くらしの中から考える

## 昆虫採集

夏といえば昆虫採集。チョウやバッタを夢中になって追い掛けた経験は多くの人があるでしょう。身近な自然に親しむのは大切なことですが、いじり回して弱らせたり、標本にしたりすることは虫の命を奪うことでもあります。子どもは虫と、どう向き合えばいいのでしょうか。（河郷丈史）

国立青少年教育振興機構の二〇一六年度の調査によると、対象の小中高生約一万人八千人のうち、チョウやトンボなどの昆虫を捕まえたことが「何度もある」は約48%、「少しある」は約28%、「ほとんどない」は約23%。グラフ参照。昆虫採集は多くの子どもが通る道と言えそうだが、なぜ、子どもは虫を捕まえ、遊ぶのか。「知的好奇心を育てている」と話すのは、名和昆虫博物館（岐阜市）館長の名和哲夫さん（66）。科学や文明を築き繁栄してきた人類にとって知的好奇心は生きる上で欠かせない。それを伸ばそうとするのは本能で、「虫は良い先生」と言う。その結果、虫が死ぬこともあり、「かわいそうだからやめなさい」「捕まえずに放してあげて」などと言う人もいる。数の少ない希少種もあり、昆虫採集が「自然破壊」などと批判された時期も。今もインターネット上には「残酷」との意見もある。

### ◆死ねばかわいそう

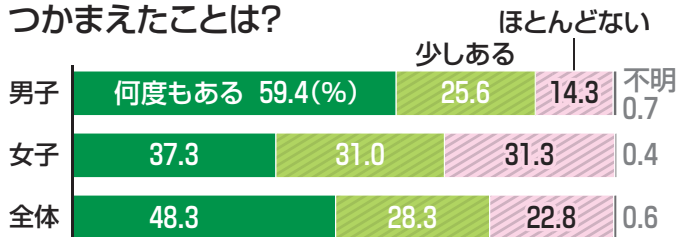
### ◆命考えるきっかけ

## 「自然を破壊」批判も

だが、名和さんは「できれば見守ってほしい」。虫が死んだら、なぜ死んだのか、自分がやったこと、結果を考えさせれば、命について考えるきっかけにもなる。

また、名和さんは「虫の生命力はたくましく、子どもが捕まえる程度では、いなくならない。むしろ、大人の開発行為によって自然が壊され、多くの虫のすみかが奪われている」と指摘する。また、カブトムシやチョウのように飼われたり観賞されたりする虫もいれば、ゴキブリのように「害虫」として殺される虫もいる。「虫を通じて自然を学び、人間と自然の関係を考えられる大人になってほしい」幼児期に昆虫を飼育する経験が命や死への理解を深めるとの調査結果も。幼児教育が専門の東洋英和女学院大准教授の山下久美さん（64）が〇六年に発表した研究だ。五〜六歳の園児百人に、ダンゴムシが死んだら生き返るかを尋ねたところ、「生き返

チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたことは？



※小中高生対象、国立青少年教育振興機構調査（2016年度）から

## 知的好奇心を育てる

「命を大切にしたい」との思いで飼育を経験させれば、その思いは子どもの中に着実に育っていく」と話す。また、名和さんは「虫の生命力はたくましく、子どもが捕まえる程度では、いなくならない。むしろ、大人の開発行為によって自然が壊され、多くの虫のすみかが奪われている」と指摘する。また、カブトムシやチョウのように飼われたり観賞されたりする虫もいれば、ゴキブリのように「害虫」として殺される虫もいる。「虫を通じて自然を学び、人間と自然の関係を考えられる大人になってほしい」幼児期に昆虫を飼育する経験が命や死への理解を深めるとの調査結果も。幼児教育が専門の東洋英和女学院大准教授の山下久美さん（64）が〇六年に発表した研究だ。五〜六歳の園児百人に、ダンゴムシが死んだら生き返るかを尋ねたところ、「生き返

意見送ってください

記事への感想や昆虫採集の思いを送ってください。紙面で紹介したお子さんの中から抽選で図書カードをプレゼント。応募は〒460 8511 中日新聞（東京新聞）生活部「学ぶ」係＝ファクス052（222）5284、メール seikatu@chunichi.co.jp＝へ。QRコードから、ワークシート兼応募用紙もダウンロードできます。27日締め切り。

